

各関係機関長 殿

岡山県病虫害防除所長

病虫害発生予察情報について

病虫害発生予報第4号を下記のとおり発表したので送付します。

令和5年度病虫害発生予報第4号

令和5年6月28日
岡山県

予報概評

作物名	病虫害名	発生時期	発生量
水 稲	葉いもち	—	並
	穂いもち	並	並
	紋枯病	並	やや多
	ヒメトビウンカ	—	並
	縞葉枯病	—	並
	ツマグロヨコバイ	—	やや多
	ニカメイガ	—	並
	セジロウンカ	—	少
	トビイロウンカ	並	並
斑点米カメムシ類	—	やや少	
モ モ	せん孔細菌病	—	やや多
	灰星病	—	やや少
	モモハモグリガ	—	やや少
	ナシヒメシンクイ	—	やや多
	ハダニ類	—	やや多
ブドウ	晩腐病	—	並
	べと病	—	やや多
	うどんこ病	—	やや少
	フタテンヒメヨコバイ	—	並
	チャノコカクモンハマキ	—	やや少
果樹共通	カメムシ類	—	やや少
キュウリ	べと病	—	やや少
	うどんこ病	—	並
	褐斑病	—	やや多
	炭疽病	並	並
キュウリ・ナス	ミナミキイロアザミウマ	—	並
トマト	疫病	—	やや少
	葉かび病	—	やや少
(アブラナ科野菜) ダイコン	軟腐病	並	やや多
	キスジノミハムシ	—	並
	コナガ	—	やや少
野菜共通	ハスモンヨトウ	並	並
	アブラムシ類	—	やや少
	モザイク病	—	並
キ ク	白さび病	やや遅	やや少
	ハダニ類	—	やや多
	アブラムシ類	—	やや少

1. 普通作物

(水 稲)

(1) 葉いもち

予報内容

発生量 並

予報の根拠

ア. 6月20、21日の巡回調査によると、葉いもちの発生圃場率は1.3%で平年(1.7%)並であった。

イ. BLASTAM-メッシュ岡山版(以下、ブラスタム)による葉いもちの感染好適条件が県内で広域に出現したのは、6月22日のみである。6月25日までのブラスタムの結果は下表のとおりである。感染好適条件が出現後、約1週間頃に初発あるいは病斑数の急激な増加が予想される。

ウ. 6月22日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並とされており、発病を助長する条件ではない。

防除上の参考事項

ア. 補植用の苗は、伝染源となるので処分する。

イ. 箱処理剤を使用していない圃場では、発生を確認後、速やかに防除を行う。

箱処理剤を使用している圃場で発生を確認した場合、箱処理剤と同系統の薬剤の使用を避ける。

ウ. 現時点で未発生の圃場でも、耐病性の弱い品種(コシヒカリ、あきたこまち、ヒノヒカリ、朝日)は初発後の病勢進展が速いので、早期発見、早期防除に努める。

エ. 本病は、曇雨天日が多い場合に発病が助長されるので今後の気象に注意する。

表 アメダスデータから推測される葉いもちの感染好適条件の出現状況

(BLASTAMメッシュ岡山版)

地帯区分	北部地帯					中部地帯					南部地帯				
	上長田	千屋	奈義	古町	新見	久世	津山	福渡	和気	高梁	岡山	虫明	倉敷	笠岡	玉野
6.12	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
13	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
14	●	○	●	—	—	—	●	●	—	—	—	—	—	—	—
15	●	—	●	●	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
16	—	○	—	●	—	—	—	—	●	●	—	—	—	—	—
17	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
18	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
19	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	—	—	—	—	—
20	—	—	×	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
21	—	—	—	—	×	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
22	○	○	●	●	—	●	●	●	●	●	—	—	—	—	—
23	○	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
24	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
25	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

●：感染好適条件 ○：準感染好適条件 —：感染好適条件は現れなかった

(2) 穂いもち (極早生種対象)

予報内容

発生時期 並

発生量 並

予報の根拠

ア. 極早生種の生育は概ね平年並である。

イ. 6月20、21日の巡回調査では、葉いもちの発生圃場率は1.3%で平年(1.7%)並であった。

ウ. ブラストムによる県中北部における葉いもちの感染好適条件は、6月22日に比較的広域に出現した。6月25日までのブラスタムの結果は前表のとおりである。

エ. 6月22日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並とされており、発病を助長する条件ではない。

防除上の参考事項

ア. 本病は、曇雨天日が多い場合に発病が助長される。

(3) 紋枯病

予報内容

発生時期 並

発生量 **やや多**

予報の根拠

ア. 6月20、21日の巡回調査では、平年同様発生を認めなかった。

イ. イネの茎数は概ね平年並で推移している。

ウ. 6月22日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並とされており、発病をやや助長する条件である。

(4) ヒメトビウンカと縞葉枯病

予報内容

ヒメトビウンカ (第2世代幼虫)

発生量 並

縞葉枯病

発生量 並

予報の根拠

ア. 赤磐市の予察灯における6月1～4半旬の誘殺数は8頭で、平年(3.1頭)より多かった。

イ. 6月19～21日の巡回調査におけるすくい取り調査(20回振り)による発生圃場率は18.5%で平年(45.5%)より低く、1地点あたりの成幼虫発生量は2.4頭で平年(2.2頭)並であった。

ウ. 近年の県南部における縞葉枯病の発生は、概ね平年並で推移している。

(5) ツマグロヨコバイ (第2世代幼虫)

予報内容

発生量 **やや多**

予報の根拠

ア. 赤磐市の予察灯における第1世代の初誘殺は5月6半旬で平年(6月1半旬)並、6月1～4半旬の飛来数は292頭で、平年(35.5頭)より多かった。

イ. 6月19～21日の巡回調査における見取り・払い落とし調査による発生圃場率は2.6%で平年(4.4%)より低かった。

ウ. 6月19～21日の巡回調査におけるすくい取り調査(20回振り)では、1地点あたりの成幼虫の発生量は0.2頭で平年(0.4頭)よりやや少なかった。

エ. 6月22日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並とされており、本虫の増殖をやや助長する条件である。

防除上の参考事項

ア. ツマグロヨコバイが媒介する萎縮病は、近年巡回調査において発生を認めていない。

(6) ニカメイガ (第1世代幼虫)

予報内容

発生量 並

予報の根拠

ア. 赤磐市のフェロモントラップにおいて6月4半旬までに平年同様誘殺を認めていない。

(7) セジロウンカ

予報内容

発生量 少

予報の根拠

ア. 6月19～21日の巡回調査における見取り・払い落とし調査での発生圃場率は1.3%で、平年(3.7%)より低かった。

イ. 6月19～21日の巡回調査におけるすくい取り調査(20回振り)では、1地点あたり成虫発生量は0.2頭で平年(0.9頭)より少なかった。

ウ. 赤磐市の予察灯における6月1～4半旬の誘殺数は0頭で、平年(7.6頭)より少なかった。

エ. 6月22日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並とされており、本虫の増殖をやや助長する条件である。

(8) トビイロウンカ

予報内容

発生時期 並

発生量 並

予報の根拠

ア. 赤磐市及び真庭市の予察灯において平年同様6月5半旬までに飛来を認めていない。

イ. 6月19～21日の巡回調査において発生を認めなかった。

(9) 斑点米カメムシ類 (アカスジカスミカメ)

予報内容

発生量 やや少

予報の根拠

ア. 赤磐市の予察灯における6月1～5半旬の誘殺数は51頭で平年(50.8頭)並であった。

イ. 6月19、20日の県北部イネ科牧草地のすくい取り調査(20回振り)では、アカスジカスミカメの発生量は1地点当たり3.3頭で平年(37.9頭)より少なかった。

ウ. 6月22日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並とされており、本虫の増殖をやや助長する条件である。

防除上の参考事項

ア. イネ科植物の穂は餌であり、産卵場所でもあるため、水田周辺のイネ科植物は除去する。ただし、穂の付いたイネ科植物をイネの出穂2週間前から出穂後3週間の間に除去すると、カメムシを水田に追いやることになるので避ける。

2 果 樹

(モ モ)

(1) せん孔細菌病

予報内容

発生量 **やや多**

予報の根拠

ア. 6月22日の巡回調査によると、発生圃場率は39.3%で平年(31.4%)よりやや高かった。

イ. 6月22日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の降水量はほぼ平年並とされており、発病を助長する条件ではない。

防除上の参考事項

ア. 次作における伝染源量を減少させるために収穫後の防除を徹底する。

(2) 灰星病

予報内容

発生量 やや少

予報の根拠

ア. 県予察圃場における6月23日の幼果の発病果率は0.7%で、平年(11.5%)より低かった。

イ. 4月下旬の巡回調査では花腐れの発生圃場率は平年より低く、6月23日の巡回調査の幼果での発生は少なかった。

ウ. 6月22日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の降水量はほぼ平年並とされており、発病を助長する条件ではない。

(3) モモハモグリガ(第3世代幼虫)

予報内容

発生量 やや少

予報の根拠

ア. 赤磐市のフェロモントラップにおける6月1～4半旬の誘殺数は1頭で、平年(0.3頭)並であった。

イ. 6月22日の県南部巡回調査では発生を認めず、発生圃場率は平年(1.6%)より低かった。

ウ. 6月22日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並とされており、本虫の増殖をやや助長する条件である。

(4) ナシヒメシンクイ(第3世代幼虫)

予報内容

発生量 **やや多**

予報の根拠

ア. 赤磐市のフェロモントラップにおける6月1～4半旬の誘殺数は13頭で、平年(10.3頭)よりやや多かった。

イ. 6月22日の県南部巡回調査における新梢被害発生圃場率は25.0%で、平年(20.0%)よりやや高かった。

ウ. 6月22日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並とされており、本虫の増殖をやや助長する条件である。

(5) ハダニ類

予報内容

発生量 **やや多**

予報の根拠

ア. 6月22日の県南部巡回調査における発生圃場率は42.9%で、平年(22.5%)より高かった。

イ. 6月22日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並とされており、本虫の増殖をやや助長する条件である。

防除上の参考事項

ア. ハダニ類の発生はシロツメクサ等マメ科の下草が繁茂する圃場で多く、ハダニ類が樹上に移動する除草後の発生状況に注意する。

イ. ハダニ類の発生が多い圃場では、サビダニの発生も多い。

(ブドウ)

(1) 晩腐病

予報内容

発生量 並

予報の根拠

ア. 6月の降水量は平年よりやや少なかったことから、幼果の感染は平年よりやや少ないと考えられる。

イ. 6月22日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の降水量はほぼ平年並とされており、発病を助長する条件ではない。

防除上の参考事項

ア. ベノミル剤(ベンレート水和剤)及びアゾキシストロビン剤(アミスター20フロアブル、ストロビードライフロアブル)に対して感受性が低下した菌株が本県各地で確認されている。

(2) ベと病

予報内容

発生量 やや多

予報の根拠

ア. 県予察圃場では、平年(6月24日)より早い6月2日に初発生が認められた。

イ. 6月22日の巡回調査によると、発生圃場率は100.0%で平年(37.3%)より高かった。

ウ. 6月22日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並とされており、発病をやや抑制する条件である。

防除上の参考事項

ア. 梅雨時期の連続降雨により急に病勢が進展する可能性がある。

イ. ブドウベと病に登録のあるストロビルリン系殺菌剤(アゾキシストロビン剤(アミスター20フロアブル)、クレソキシムメチル剤(ストロビードライフロアブル)、ファモキサドン剤(ホライズンの一成分))に対する耐性菌が本県の一部で確認されている。本系統の殺菌剤の使用は1作期1回とし、他系統の殺菌剤と組み合わせて使用する。

ウ. 植物防疫情報第2号(6月15日発表)及び第3号(6月23日発表)参照。

(3) うどんこ病

予報内容

発生量 やや少

予報の根拠

ア. 6月22日の巡回調査によると、発生圃場率は0%で平年(10.9%)より低かった。

イ. 6月22日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の降水量はほぼ平年並とされており、発病を助長する条件ではない。

(4) フタテンヒメヨコバイ(第2世代幼虫)

予報内容

発生量 並

予報の根拠

ア. 6月22日の県南部巡回調査において発生を認めず、平年(0.7%)並であった。

イ. 6月22日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並とされており、本虫の増殖をやや助長する条件である。

(5) チャノコカクモンハマキ(第2世代幼虫)

予報内容

発生量 やや少

予報の根拠

ア. 赤磐市のフェロモントラップにおける6月1~4半旬の誘殺数は3頭で、平年(6.7頭)より少なかった。

イ. 6月22日の県南部巡回調査では平年同様発生を認めなかった。

ウ. 6月22日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並とされており、本虫の増殖をやや助長する条件である。

（果樹共通）

（1）カメムシ類（チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ）

予報内容

発生量 やや少

予報の根拠

ア. 赤磐市の予察灯における4月～6月5半旬のチャバネアオカメムシの誘殺数は5頭で平年（51.4頭）より少なく、ツヤアオカメムシの誘殺数は21頭で平年（47.2頭）より少なかった。

イ. 赤磐市のフェロモントラップにおける4月～6月5半旬のチャバネアオカメムシの誘殺数は、16頭で平年（395.8頭）より少なかった。

ウ. 6月22日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並とされており、本虫の増殖をやや助長する条件である。

3. 野菜

（キュウリ）

（1）べと病

予報内容

発生量 やや少

予報の根拠

ア. 県予察圃場（5月10日定植）において、発病葉率は27.9%で平年（22.1%）並であった。

イ. 6月21、22日の巡回調査によると、発生圃場率は57.1%で平年（44.2%）並であった。

ウ. 6月22日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並とされており、発病をやや抑制する条件である。

（2）うどんこ病

予報内容

発生量 並

予報の根拠

ア. 県予察圃場（5月10日定植）において、発病葉率は0.3%で平年（9.4%）よりやや低かった。

イ. 6月21、22日の巡回調査によると、発生圃場率は85.7%で平年（59.8%）より高かった。

ウ. 6月22日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並とされており、発病を助長する条件ではない。

（3）褐斑病

予報内容

発生量 やや多

予報の根拠

ア. 県予察圃場（5月10日定植）において、発生を認めず、平年（2.0%）並であった。

イ. 6月21、22日の巡回調査によると、発生圃場率は28.6%で平年（19.7%）よりやや高かった。

ウ. 6月22日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並とされており、発病をやや助長する条件である。

（4）炭疽病

予報内容

発生時期 並
発生量 並

予報の根拠

- ア. 県予察圃場（5月10日定植）において、平年同様発生を認めなかった。
- イ. 6月21、22日の巡回調査では発生を認めず、平年（4.6%）並であった。
- ウ. 6月22日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並とされており、発病を助長する条件ではない。

（キュウリ、ナス）

（1）ミナミキイロアザミウマ

予報内容

発生量 並

予報の根拠

- ア. 6月21、22日の巡回調査によると、露地、施設栽培のナス及びキュウリでの発生量は平年並であった。
- イ. 6月22日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並とされており、発生をやや助長する条件である。

（トマト）

（1）疫病

予報内容

発生量 やや少

予報の根拠

- ア. 6月21、22日の巡回調査によると、県南部の促成栽培、露地栽培及び県北部の雨除け栽培での発生圃場率は9.1%で平年（7.0%）並であった。
- イ. 6月22日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並とされており、発病をやや抑制する条件である。

（2）葉かび病

予報内容

発生量 やや少

予報の根拠

- ア. 6月21、22日の巡回調査によると、県南部の促成栽培、露地栽培及び県北部の雨除け栽培での発生圃場率は9.1%で、発生圃場率は平年（22.8%）よりやや低かった。
- イ. 6月22日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並とされており、発病を助長する条件ではない。

防除上の参考事項

- ア. 本病の初発生時期（雨除け栽培トマトでは6月下旬～7月上旬）と病勢進展時期（7月下旬～8月上旬）に効果の高い殺菌剤を予防散布する防除体系は、葉かび病の防除に有効である。
- イ. 一部地域で Cf-9 を持つ抵抗性品種を侵すレースが確認されているので、発生を認めた場合には速やかに防除対策をとる（平成22年度植物防疫情報第4号参照）。
- ウ. 本県では、トマト葉かび病に類似した病徴を示すトマトすすかび病の発生が認められている。肉眼での判別は困難であるが、顕微鏡下で観察すれば、トマトすすかび病菌の分生子が細長い形状であることから葉かび病とは容易に区別できる（平成18年度病害虫発生予察特殊報第2号参照）。

（アブラナ科野菜）

（ダイコン）

（1）軟腐病

予報内容

発生時期 並
発生量 やや多

予報の根拠

ア. 6月21日の巡回調査では発生を認めず、発生圃場率は平年(4.6%)並であった。

イ. 6月22日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並とされており、発病をやや助長する条件である。

(2) キスジノミハムシ

予報内容

発生量 並

予報の根拠

ア. 6月22日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の降水量はほぼ平年並とされており、発生を助長する条件ではない。

(3) コナガ

予報内容

発生量 やや少

予報の根拠

ア. 6月1～4半旬の県予察圃場(赤磐市)におけるフェロモントラップへの誘殺数は11頭で、平年(22.8頭)よりやや少なかった。

イ. 6月22日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の降水量はほぼ平年並とされており、発生を助長する条件ではない。

(野菜共通)

(1) ハスモンヨトウ

予報内容

発生時期 並

発生量 並

予報の根拠

ア. 6月1～4半旬の県予察圃場(赤磐市)のフェロモントラップの誘殺数は106頭で、平年(106.0頭)並であった。

イ. 6月21、22日の巡回調査によると、ナス、トマト、キュウリでの発生は認められず、発生圃場率は平年(0%)並であった。

ウ. 6月22日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の降水量はほぼ平年並とされており、発生を助長する条件ではない。

(2) アブラムシ類とアブラムシ伝搬性のモザイク病

予報内容

発生量 アブラムシ類 やや少

モザイク病 並

予報の根拠

ア. 6月1～4半旬の県予察圃場(赤磐市)の黄色水盤への飛来数は123頭で、平年(324.9頭)よりやや少なかった。

イ. 県予察圃場(赤磐市)における6月下旬のキュウリでのアブラムシ類の発生量は平年並であった。モザイク病は、平年同様発生を認めなかった。

ウ. 6月21、22日の巡回調査では、アブラムシ類の発生量はキュウリ、トマトともにやや少なかった。モザイク病の発生圃場率は、トマトでは0.0%(平年17.8%)とやや低かったが、キュウリでは14.3%(平年10.5%)で平年並であった。

エ. 6月22日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の降水量はほぼ平年並とされており、本虫の発生を助長する条件ではない。

防除上の参考事項

ア. モザイク病の発病株は伝染源になるので早めに除去し、アブラムシ類の防除

を行う。

4. 花 き

(キ ク)

(1) 白さび病

予報内容

発生時期 やや遅

発生量 やや少

予報の根拠

ア. 6月21、22日の巡回調査では発生を認めず、発生圃場率は平年(8.1%)よりやや低かった。

イ. 6月22日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並とされており、発病をやや抑制する条件である。

(2) ハダニ類

予報内容

発生量 **やや多**

予報の根拠

ア. 6月21、22日の巡回調査によると発生圃場率は20.0%で平年(6.3%)よりやや高かった。

イ. 6月22日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の降水量はほぼ平年並とされており、発生を助長する条件ではない。

(3) アブラムシ類

予報内容

発生量 やや少

予報の根拠

ア. 6月1～4半旬の県予察圃場(赤磐市)の黄色水盤への飛来数は123頭で、平年(324.9頭)よりやや少なかった。

イ. 6月21、22日の巡回調査によると発生を認めず、発生圃場率は平年(12.7%)より低かった。

ウ. 6月22日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の降水量はほぼ平年並とされており、発生を助長する条件ではない。

この情報は、岡山県病虫害防除所ホームページでも公開しています。アドレスは、
<http://www.pref.okayama.jp/soshiki/239/> です。

